

日本語なのに「聞き取れない」!?

「今、なんて言いました?」。聴き直すという事は誰にもあるし、原因だって話し手の滑舌の悪さ、発音の悪さが引き金になっていることだってあるわけで、聞き手の聴力が問題はかりではありません。

けれども近頃、難聴という“聞き取りにくさ”にちょっと気になる新型が登場してきたようです。難聴は耳の構造や、音の伝達の問題が主な引き金になって起きると考えられていますが、最近では特定の条件で聞こえにくさが生じたり、聞こえた音の解釈に問題が生じる「聴覚情報処理障害」という現象が話題となっています。

これは、聴力は充分あり、車のクラクションや日常音は聞き分けられるのに「人との会話になると、相手が何を言っているのか分からない」という症状で、客との対応も難しくなり仕事を失ったという例も出てきているようですから深刻です。もちろん原因の特定や治療には、医療の観点からの診断が必要ですが、この現象が日本ではメールやLINEを常用している人に目立つというので、それをヒントに日本においては別の角度からの対策があるのではないかと考えました。

それはたびたび私が取り上げている、日本語のユニーク性に基づくものです。日本語には他言語に比べて同音異義語が非常に多いというユニークな特性があり、それが「聴覚情報処理障害」の発症の背景となって、聞こえた音の解釈の混乱を招きやすくしているのではないかとと思われるのです。

同音異義語とは、「ハシ」という同じ一つの読み音に「橋、箸、端」など多くの異なる意味の言葉が生まれている現象ですが、話し手の言う「ハシ」はどの意味を指しているのかを、聞き手は話し手の文脈から最適な意味を拾い出し、適宜当てはめるといった活動が日本語では会話と同時に脳の

中で行われているのです。ところが最初から文字で届き、文字で返すメールやLINEというコミュニケーション手段では、この「音から意味を探す」という活動が伴いません。使わない機能は劣化するものですが、「今、なんて言いました?」という「音と意味の乖離」という現象は、そんなところから生じていると考えることができそうです。

とはいえ、メールやLINEはすでに前提となった世の中です。それらと共存しながらこの手の難聴にならないようにするには、脳の中で音と意味を強く繋いでおく工夫が必要です。それには、いろいろな人と“直接話す”ことをしましょう。“直接話す”ことが、間髪を入れずに「音から意味を探す」訓練になるのです。すると言葉の数を増やす必要が意識され、本や新聞などから言葉を集めるようになり、脳の中に同音異義語のグループが整理されてくるのです。

近頃、「空気が読めない」人が増えてきたといわれます。「音から意味を探す」という活動の活性化は、考える力や観察力のアップにも繋がります。デジタル環境下での文字離れは、日本では「音と意味の乖離」となって、思わぬところに影を落としているようです。



筆者紹介

玄間千映子（げんま・ちえこ）

（株）アルティスタ人材開発研究所代表。國學院大学卒。米インマヌエル大学大学院卒後、米スタンフォード大学ビジネススクール修了。財団法人日本船舶振興会（現日本財団）役員、国会議員各秘書を経て1994年に前身の（有）アルティスタを設立し代表に。2006年現社名に改組。日本経済大学大学院非常勤講師、（一社）水底質浄化技術協会監事などを兼任。著書に「ジョブ・ディスクリプション 一問一答」「リストラ無用の会社革命」など。

